



特別試読版 ep4

GA文庫

相反する少年少女が
世界を再構築する
ヒロイックファンタジー!

世界を救うため、
彼女と手を取り合い戦え——

私が世界を
滅ぼす前に、
どうか私を
救いたい

World End Chronicle
Before you betray the world
Story by Shimono Osaikai
Art by Isegawa Yasutaka

霜野おつかい
イラスト イセ川やすたか

「だから！ やつから何度もそういってるじゃない！」

「……つ、ん？」

耳に突き刺さる悲痛な声で、クロウの意識はゆるゆると覚醒する。

重い頭を無理やりに持ち上げて、あたりをうかがつてみれば——。

「ここは……」

民家が丸々一軒入りそうなほどの、広い応接間だ。

調度品はどれも庶民が見てもわかるほどの一級品で、天井は真っ白な大理石。

クロウが座らされているこのソファセットだつて、革張りの上等品だ。

だがしかし、その居心地の良さを堪能することは叶わない。

なぜか全身を荒縄でぐるぐる巻きに縛り上げられていたからだ。

おまけにすぐ目の前には、すさまじい威圧感を放つ人物が座つていた。

「おつ、今度はこつちが気付いたか」

ローテーブルを挟んだ向こう。革張りの安楽椅子に収

あんらくいす

まるのは、小柄な人物。

その顔を確認してクロウの喉^{のど}がひゅつと鳴つた。

「と、トリス様……」

「かはは、ぐっすり眠れたようだな。クロウ」

王室顧問魔術師、トリス。

ニヒルな笑みを浮かべる彼女の手には、無骨な銀の拳銃が握られていた。小さな手には余るはずのそれを器用にくるくると回す。

「いやあ、驚いたのなんのつて。屋敷に戻ってきてみたら、うちのお姫様とおまえがドンパチやつてんだもん。だから催眠ガスで眠らせて、縛つてここに連行してみたんだけど……」

チャキツと軽^{かる}やかに安全装置を外し、銃口を真つすぐロウに向ける。

「異論があるなら聞くぜ。ただし、体のどつかに風穴が空いちやうかもしれないけど？」

「あはは……異議なしでーす」

「私は文句大ありなんだけど!?」

顔を引きつらせると同時に隣から怒声が上がる。

そこにはまなじりを限界までつり上げたりインが座つていた。クロウと同じで荒縄のぐるぐる巻きである。寝

間着に縄が食い込んで、かなり煽情的^{せんじょう}なありさまだ。

「なんで私まで縛られているわけ!? この男はともかくとして、どう考えてもおかしいじゃない！」

「えー。だつてそうしないと絶対おまえらまた喧嘩けんかを始めるだろ？」

「だーかーらー！ さつきのはただの喧嘩じゃないって何度も言つてるでしょ！」

リインはじろりとクロウをにらむ。

「私はこの国こくが滅ぶ、破滅の未来から戻ってきたの！ その原因げんを作つたのが、ほかでもないこの男おとこ！ その未来を変えるために、そいつを殺そうとしてたんだってば！」

「……うちのお姫様はこう言つているんだけどさ、クロウ」

トリスは目をすがめ、クロウを見やる。

「おまえさんも、なにか言いたいことがあるんじゃないのか？」さつきこいつと戦つてたときは、いろいろと気になることを叫んでいたようだしさ」

「……黙秘する、って言つたらどうなりますかね」

「別にかまわねえけど？」きつつい自由剤を盛るつて選択もあるしな」

「しゃべります。だからその、いかにも怪しい試験管をしまつてください。早く」

「ちえー、自信作だつたのになー」

「ぽこぽこと泡の立つ螢光グリーンの謎の液体を、トリスはしぶしぶ^{ふとこう}懷にしまう。

冗談めかしてはいるものの九割がた本気だろう。

クロウはため息をこぼしつつ、ぽつぽつと語った。

自分もまた十年後の未来からこの時代へと戻ってきたこと。

未来ではリインに騙されだま、彼女が国を滅ぼす手助けをしてしまつたこと。

その破滅の未来を食い止めるために……リインを殺しに来たこと。

すべてを打ち明けた後、トリスはあごを撫なでながら唸うなる。

「まさか師匠じとうが未来のあたしとは。それなら影導魔術を使えることに納得はいくんだけど……おまえさんたちの主張をまとめるとだ。ふたりとも十年後の未来からやつ

てきて……未来が滅ぶその原因が、相手の方だつて言いたいわけだな？」

「その通りなんですが……意味わかんないですよね」
クロウはため息をこぼすしかない。

自分は……たしかにリインがこの国を、世界を滅ぼす
様を見た。

それなのに当のリインは、それはクロウの方だと言つ
て譲らないのだ。

「たしかにわかりやすく矛盾してゐるよな。どつちかが嘘うそ
をついている、つてことなら単純なんだけどさ」

「ちよつ、ちよつと待つてよトリス！ この男はともか
くとして私を疑うわけ!? 十年以上も一緒に暮らしてゐ

くせに！」

「いや、信用したいのはやまやまだぜ？」 でもさあ
⋮⋮⋮

身を乗り出して抗議するリインに、トリスは肩をすく
めてみせる。

「だつたらおまえ、なんであたしにそんな大事な話を黙
つていたんだ。長い付き合いなら真っ先に相談するはず
だろ」

「うつ……だ、だつて……」

リインは勢いを失くして、しゅんとうなだれてしまう。
「未来から戻ってきたなんて、めちゃくちゃな話だつ
て自分でも思うし……ちゃんと信じてもうえるか不安だ

つたんだもの

「……つたく。バカだなあ、おまえは」

「わわつ」

トリスはテーブルの向こうから身を乗り出して、リインの頭をわしゃわしゃとかき混ぜる。外見は年の近い姉妹しまいといつたところだが、こうしてみると親子のような、祖母と孫のような……そんな不思議な空気だつた。

上目遣いでうかがうリインに、トリスは柔らかな苦笑を向ける。

「あたしは、おまえを赤ん坊のころから面倒見ている親代わりなんだぜ？　もつと信用してくれよな。ちやーんと信じてやるともさ」

「トリス……」

「リインは瞳ひとみをうるませてから、クロウのことをお『』で示す。

「それじゃあ、さつそくこの男を始末しちゃいましょ。簍巻すまきにしてサメの多い海域に放り込むもよし、足からちよつとずつ切り落としていくもよし、車裂くるまざきにするもよし！」

「うん。それとこれとは話が別だな」

「なんでよ!? 信じてくれるつて言つたのに！」

「つーか俺おれを殺す方法が全部妙にグロいのはなんでなんだ……ギヤングか海賊かなにかか、おまえは」

「お姫様よ！ そんなの積年の恨みが詰まつてゐるからに

決まつてるでしょ！」

堂々と言つてのけるリインだつた。

恨みならクロウの方も相當あるのだが……泥沼になるのがわかりきつていたため、反論はぐつとのみ込んでおく。

そんなふうににらみ合うふたりをしり目に、トリスは飄々と肩をすくめてみせる。

「真偽をたしかめずに動くのはあたしの主義に反するんでね。ここはひとつたしかめてみようじゃないか。どうちが嘘をついているのかを」

「たしかめるつて……どうやつて？」

「なあに、ゴゴゴゴ平和的な手法さ」

そう言つて指を鳴らせば、どこからともなく魔道人形のメイドが現れた。

メイドが運んでくるのは台車に乗つた謎の機械だ。ひどく「ごちやごちや」とした外観からは、何に使用するものなのか見当もつかない。

「なんですかこれ……拷問器具かなんかですか？」

「平和的って言つただろ。ちよつと前に、遊びで作ったものなんだけどさ。魔術を使つてない機械だから、リインにも効くし……つと」

トリスがそれをかちやかちやといじれば、機械のランプに光が宿つて――。

「それじゃ、見せてもらおうかな……真実つてやつを

さ！

「「つ!?」

まばゆい光が弾けたその瞬間。

クロウの頭の中に、見知らぬ映像が再生される。

それはクロウもよく知る十年後の光景だ。

赤く染まつた空に浮かぶ、魔界の扉。

終わりかけた世界のただ中……小高い丘にて、血まみれの女が倒れていた。

簡素な鎧よろいをまとつた彼女は、ぼうぜん呆然と目の前の人物を見上げるばかり。

その視線の先に立っていたのは——。

(俺……!?)

十年後のクロウ、その人だつた。

漆黒のローブをまとうその姿は、一級の魔術師と呼ぶべき風格をたたえている。

だがその目は暗くよどんでいて……彼はふつと自嘲氣

味に笑う。

『俺が世界を滅ぼす前に……どうか俺を殺してくれ』

そう言って彼は金の指輪を差し出した。

そこで、映像は途切れる。

「つ……なにこれ!？」

「人の記憶を覗く装置さ。リインの記憶をクロウに、ク

□ウの記憶をリインに見せた」

トリスはふたりを交互に指し示し、いたずらつぽく笑う。

しかしそのまま元はすこしづかかり引きつっていて、彼女にしてはどこか苦々しいものだつた。

「そんでも、あたしは両方の記憶を覗のぞかせてもらつたんだが……くくく、お遊びで作つたにしてはうまくいったなあ。我ながら才能が恐ろしいぜ」

「い、いやいや！ 待つてください！ おかしいですつて！」

ひとり納得するトリスに、クロウはツツコミを入れる。いくら頭をひねつても、絞り出しても、あんな光景に

覚えはない。

「立ち位置がまるつきり逆なんですってば！　俺がこいつを止めようとして、ボコボコにされた側なんですよ！」

「そつ、そうよそうよ！　そもそも私が、あんな変なヒ

エロみたいなやつとつるむわけないじゃない！」

「あ……言われてみれば、おまえの記憶の中にもいたな、
あいつ」

十年後の未来で、クロウに不意打ちを浴びせかけた敵。
名前もわからぬ魔族の道化師。

そのやけに目立つ姿が、先ほど見せられた中にも確認
できた。

おまけに、リインに聞けばその年月日もぴたりと一致

していたのだ。

「つまり俺たちの主張する未来は、筋書きはそつくりそのまま同じだけど……復讐者ふくしゅうとその仇かたき。その配役だけが入れ替わつてゐる、つてことか？」

「配役つて、お芝居しばゐじやあるまいし……あつ！」

そこでリインはハツとしたように、クロウに食つて掛かるのだ。

「あなた、魔術でなにか細工したんでしょう！ それで偽の記憶を見せたのよ！ 違う!?」

「冗談よせよな、リイン。そんな小細工、あたしが見破れないとしても思うのかい」

「うぐつ！ で、でもそうじやなきや……こんなの説明

がつかないでしょ!」

狼狽するリイン。クロウも言葉にはしないものの、頭の中は「ごちやごちやだつた。

（たしかに、リインの記憶にいた男……あれば間違いなく俺だつた）

得体のしれない悪寒おかんが背筋を走る。

ふたりは重く押し黙るが、トリスはあつさりと断言するのだ。

「大混乱のところ悪いんだけど、説明ならたぶんできるぞ

「へ?」

「ヒントはおまえさんたちの指にあるもの。さつき出し

てただろ。ちよつと見せてみな」
指を鳴らせば、ふたりを縛つていた縄がはらりとほど
ける。

促されるままにおずおずと右手に収まる指輪を見せて
みれば……トリスの表情がかすかに曇つた。

「やつぱり本物の聖遺物、道標輪廻だ。百年ほど前に
行方不明になつた代物なんだけど……いつたいどこにあ
つたのやら。まあいい。おまえさんたち、聖遺物につい
てどれくらい知つてる？」

「……魔神が使つていた魔道具、つてことくらいしか」
三百年前。

魔界からやつてきた魔神は、絶大な力を揮つてこの世

界を脅かした。

その力の源となつたのが六つの魔道具、聖遺物と呼ばれる代物だ。

「そう。そして聖遺物は、それぞれ異なる能力を有している。そのうちでも、この指輪はいつとう特殊でね」

指輪をふたりに投げ返し、唇を歪ゆがめて彼女は嗤わらう。

「この指輪は、持ち主にやり直すチャンスを与えると言われている」

「やり直すチャンス……ですか？」

「そもそも。正しくは、世界を選び直す機会とでも言つのかな」

トリスはどこからともなく大きな羊皮紙ようひしとペンを取り

出し、それをテーブルに広げる。

「世界つてのはな、実はひとつじゃないんだよ。人の選択の数だけ分岐を繰り返す。誰かが誰かを助けたり、殺したり、はたまた出会つたり出会わなかつたり。こんなふうにな」

最初に引いたのは、一本の直線。
しかしその先端はやがて一本に分かれ、そこからさら
にどんどん枝が増えていく。

最後にできあがつたのは大木のような図だ。

「こうやつて世界は無数にできあがる。ほれ、同じ親から生まれた兄弟でも、まったく同じ性格に育つとは限ら
ねーだろ。そんな感じ。こういう分岐を並行世界つて言

うんだが……たとえば、こっちの世界で指輪の持ち主がどうしようもないような苦難に陥おちいつたとする

適当な枝の一本にバツをつけ、トリスは続ける。

「そんなときには、指輪は持ち主を過去へと送るのさ。その苦難の歴史に分岐する前の時代にな」

そう言って指示するのは大樹の根元。

「おまえさんたちの言う十年後つてのも、それぞれ枝分かれした未来のどれかなんだろう。違う世界だが大本は同じ。だからこうやって、指輪を使って大本の時代で再会した

「つまり私たちつて……」

「異なる未来から戻ってきた、つてことなのかな……？」

クロウはリインが裏切り者になつた未来から。

リインはクロウが裏切り者になつた未来から。
それぞれ戻つてきた……のだという。

ふたり同時に顔を見合わせて、ごくりと喉を鳴らす。
にわかには信じがたい話だ。だが、筋は通っているよ
うな気がする。

「そもそもその指輪は世界にひとつしか存在しないはず
なんだ。それなのに、この場にあるのはふたつ。おまえ
さんたちが別々の世界からやつてきたなによりの証拠だ
ろ」

トリスは神妙な面持ちでごを撫でる。

「しつかし聖遺物が集まつて世界が滅ぶとは、なんとも

スケールの大きな話だねえ。でも今見た限りじゃそれも
マジつぽいし……うん？」

しかしふとなにかに気付いたように、小さな眉^{まゆ}をひそ
めてみせた。

「つーか。そんな大変なときに、あたしはなにをやつて
いるんだ？」

「へ？」

「おまえさんたちの記憶じや、あたしの姿はなかつた
ろ？ どつちの世界でもリインが噛んでるんだ。あたし
が大人しく黙つているとは思え……うん？」

黙り込んだふたりに、トリスは小首をかしげる。
しかし、すぐにはつと気付いたようで半笑いをうかべ

るのだ。

「お、おいおい、なんだよその空氣。それはさすがに冗談きついって」

「……残念ですが、その」

「十年後に、トリスはいないわよ」

□ごもるクロウのかわりに、リインがきつぱりと答えた。

トリスはしばし押し黙つてから重い□を開く。

「ひよつとして、その……トランヴァース王国が滅亡したときかい？」

「いいえ、その三年後。深縁^{しんりようく}の谷消失事件のときよ」

「はい!?

広々とした室内に悲鳴のような声が響き渡った。

「た、谷が消えただつて……？ この世で最も堅牢な魔術要塞都市が!?」

「……そうですよ。聖遺物が奪われたあげく、一晩のうちに跡形もなく更地になりました」

クロウはため息まじりにうなづいた。

深緑の谷。

エルフ族が治める、永世中立都市の名である。千年も前から姿を変えずには存在しており、魔神が現れた三百年前ですらほとんど被害を受けなかつたということで知られている。

だがしかしそんな難攻不落の都市ですら、十年後の末

来においては消失していた。

生き残りがほとんどいなかつたため、いつたいたにがあつたかも不明のまま。

ただ、エルフのひとりとりインが共謀し、聖遺物を奪つたのだという噂が、まことしやかに囁かれていた。

「トリス様は、トランヴァース王国滅亡事件のときはからうじて難を逃れました。それで、この屋敷で国その後始末なんかをしながら……俺に影導魔術を叩きこんでくれたんですね」

だがしかし、それから三年ほどたつたある日。

谷にひとりで出かけて行つて事件に巻き込まれ……それつきり屋敷に帰つてこなかつた。

「……同じだわ」

そこでリインが呆然とつぶやく。

「状況も時期も……私の時とまつたく一緒に」

「……まさかとは思うけど、ほかの事件もそうなのかな？」

トランヴァース王国滅亡事件。

深緑の谷消失事件。

東龍共和国内乱事件。

その他、この国が滅んでから各地で起こつたあらゆる

重大事件。

互いの知るそれらの時期や内容は、細部に至るまで一致していた。

そして……そのほとんどに、聖遺物と互いの名前が

絡んでもいることも同じだつた。

おかげでトリスはますます顔を歪めてみせるのだ。

「どれもこれもひどい事件のようだね。相当死んだだろ
う」

「そうですね……どこもかしこも世界の終わりつて感じ
でしたよ」

「今でもまぶたを閉ざせば、あの時代の光景がまざまざ
と蘇る。

あちこちで国や街が滅ぼされ、戦火を免れた場所は難
民であふれかえつていた。

大通りには物乞ものごいが列挙し、親を亡なくした子供たちが
裏路地で暮らす光景など日常茶飯事。犯罪も急激に増加

し、日々飛び交う新聞に書かれていたのは悪いニュースばかり。

「どこに行つても、色濃い閉塞感^{へいそく}が根を張つていた。
「でも、おかしいんです。別の未来じゃ、俺がその事態
を引き起こしたつて言われても……そんなことをする理
由なんて、まるで心当たりがあります」

クロウはこの国が好きだつた。

そこそこの愛国心は持ち合わせていたし、少なくとも
この国にはリインがいたのだ。

あのころのクロウはたしかに彼女を愛していて、彼女
と過ごす日々に満足していた。

そのすべてを、自らの手で壊すはずがない。

「う……私だつてそうよ！」

リインもまた追い詰められたように声を荒らげる。

「私がこの国を滅ぼすわけないじゃない！　誰かを傷つけるくらいなら……私がかわりにいくらでも傷を負う！」

それが、英雄イオンの血を引く私のやり方よ！」

「まあ、おまえはそういうやつだよなあ」

トリスはあごを撫で、ちいさくうなずく。

（滅ぼすわけがないって……本当にそうなのかな？）

目の前にいるリインは、クロウのいた世界とは別のリインだという。

だがしかし、完全な別人というわけでもない。

そもそも彼女は王族でありながら魔神の呪いに苦しめ

られて、不当な扱いを受けている。家族から見放され、一般市民からも恐れられる境遇ともなれば……ほんのすこしくらいは世界を恨むのではないだろうか。

それが時を経て大きくなつたのだとしたら——動機は十分あることになる。

(やつぱり、こいつを殺さないと未来はつ……!?)

そうあらためて決意しかけた、そのときだ。

——否。^{いな}汝の殺意は届くに能わ^{あた}ず。

「——いつ——だだだだだだだだ!?」

頭の中では響いたかと思えば、強烈な頭痛が襲う。

リインに刃を向けたときには、そつくり同じ現象だ。

あのときと違うのは……ふたつの悲鳴が重なつたことだろう。

「……へ？」

「ううう……い、今になに……？」

見れば隣ではリインがクロウと同じように頭を抱え、涙目で呻いていた。

「なんだか、急に頭が痛くなつたんだけど……」

「えつ、おまえも……？」

「ふうん。ちよつと聞きたいんだけどさ」

トリスは目をすがめてふたりの顔を見比べる。

「おまえさんたちが道標輪廻に願つたのって、どうう
願いだつたんだ？」

「え、そりやもちろん……」

世界に降りかかつた災厄を、すべてなかつたことに。
クロウとリインの□にした願いは一字一句おなじもの
だつた。

それを聞いてトリスはますます眉根まゆねにしわを寄せる。

「なるほどねえ……だがそうなると、ますます事態は厄
介なことになるなあ」

「納得してないで教えなさいよ。さつきの頭痛となにか
関係があるわけ？」

「もちろん。関係大ありさ」

トリスは肩をすくめて、ふたりの握る指輪を指し示す。
 「その指輪は持ち主を過去に送るだけじゃない。主^{あるじ}が望む未来へ導いてくれるのさ。だから道標輪廻。持ち主が間違った選択をしようとしたとき、警告を与えてくるんだよ」

「……は？」

ふたりそろつてぽかんと口を開いて固まってしまう。
 選択を誤る……？

そこで真っ先に気付いたのはクロウの方だった。
 先ほどと、リインの寝室に忍び込んだとき。

ひどい頭痛が襲つたときの共通点といえば——。

「俺がリインを殺そうとしたこと……それが、間違いだ

つていうんですか？」

「なつ……！ あなた今そんなこと考えたの!?」

「非難するのは勝手だが……おまえもさつき苦しんでた
だろ。俺と同じじやないのかよ」

「ぐつ……た、たしかに、今なら油斷してるし、さつく
り殺せそうとは思つたけど……」

「つまりお互いの殺意を、指輪は邪魔したいわけだ」

「トリスはしばし□元に手を当てて考え込んで。

「平和な未来に……互いの存在が必要不可欠、つてこと
か？」

「はああああ!? そつ、そんなわけないでしょ！ こい
つは私の敵！ それ以下でも以上でもないわ！」

がたんつとソファを立つて吠^ほえるリインだつた。

「ちよつと待つてなさい！ こんな指輪、今すぐ海にでも投げ捨ててつ……なんで外れないわけ？」

「あー、ダメダメ。一度主^{あるじ}と認めたら、主の望みが叶^{かな}うままで取れないぞー」

「とんだ疫病神じやないですか……」

ためしにクロウも指輪を外そうとしてみるが、まるで皮膚の一部になつたかのようにはびくともしない。これは指を落とす以外に取る方法はなさそうだ。

(どうする……これじゃ計画が台無しだ)
しばしくロウは思考をめぐらせる。

未来を変えるにはリインを殺すしかない。

そう考えていたのに、おもわぬ邪魔が入った形になる。リンも指輪をじつと見つめて黙り込んでいるし……そこでクロウは、ふとした疑問を覚えるのだ。ゆっくりと顔を上げ、目の前のトリスに尋ねる。

「この指輪を捨てられないってことは、俺たちの望みはまだ叶っていない。つまり、まだ……この世界が災厄に襲われる可能性があるってことですよね？」

「ま、順当に考えればそうなるだろうね」

「…………だつたら、考えられるパターンはふたつです」
クロウはため息をこぼし、リンをちらりと見やつてから。

「ひとつ。俺とこいつのどつちかが、聖遺物を盗み出し

てこの国を滅ぼすパターン

「つつ！ バカ言わないで！ 私がそんなことするわけ
ないでしょ！」

「……俺だつてしねーよ」

勢いよくまくしたててくるリインを横目でねめつける。

「つーかその場合だつたら、俺たちが死ねば解決する話
だろ。それなのにその簡単な解決方法を指輪が止めるん
だ。だからこつちの可能性はいつたん保留にしていい」

「それじゃ聞かせてくれるかい、クロウ。残りの可能性
つていうのは？」

「……正直、あまり考えたくないんですけど」

クロウとリインが国を滅ぼす原因にならないのなら。

考えられるのは——最悪の筋書きだ。

「俺たち以外の第三者が……あの災厄を起こすことです」

「なつ……!?」

リンは顔をこわばらせるが、トリスの方はすでにその可能性に思い当たつていたようで肩をすくめるだけだった。

そんななかで、クロウは隣のリンに問いかけるのだ。「リン。ひとつ聞きたい。おまえも俺と同じで未来を変えたいんだよな?」

「そ、そんなの当然でしょ! あんな最悪な結末、もう二度と『ごめんだわ!』

「百点満点の返答だよ。だつたら……話は早い」

「そこでクロウは真つすビコインに右手を差し出して——。

「リイン。俺と手を組もう」

「は……い!?」

「へえ?」

リインが目を丸くして凍り付く。一方でトリスは片目をすがめて笑つてみせるのだ。

「どういう気の変わりようだい? おまえさんはリインを殺したいほど憎んでいるはずだろう」

「否定はしません。でも決着がつけられない今、無駄にいがみ合うのは得策とは思えません。それならいつそ手を組んで、第三の敵に対処した方が賢いじゃないです

か

「ふむ、理にかなつた考え方だね」

「そ、そんなの認められるはずないじゃない！」

「我に返つたようにリインが叫んだ。

クロウの手を振り払い、鋭くとがつた双眸そうぼうで射抜く。

「あなたは私の世界を滅ぼした『クロウ』とは別人かも
しれない。でも……だからつて手を組むなんて死んでも
ごめんだわ！ いつ裏切られたものだかわからないんだ
から！」

「ああ、そうだろうな。そして、それは俺も同じだ

「……何が言いたいわけ？」

「俺はおまえを信じるつもりはさらさらない。指輪が止

めようと、俺にとつておまえが殺すべき相手なことに変わらない」

そして、それはリインも同じことだろう。
互いを信用する必要なんて、まったくない。そもそも無理な話なのだ。

「休戦とは言つても、べつに馴^なれ合^あうわけじゃない。互いを監視し、いざとなればあらゆる手を使つてでも抹殺^{まつさう}する。そういう意味での……張りぼての同盟関係だと思つてくれていい」

「ふうん……裏切り前提つてわけね」

「そういうことだ。お互^いいこれなら気が楽だろ?」
おどけてみせるクロウだが、純然たる本気だつた。

今のリインはたしかに世界を滅ぼす気などないかもしない。

だが……いつかその気が変わらないとも限らないのだ。その日が来たとき迅速に動けるように、クロウは彼女を見張る必要がある。

リインも同じことを考えているのだろう。じつとクロウを見据えて……ため息をこぼす。

「いいわよ、だつたらのんあげようじやない」

彼女はやけくそとばかりに、ぎゅっとクロウの右手を握るのだ。

伝わるぬくもりは、肌が焼けると錯覚するほどに熱い。未来で指輪を与えた際、彼女と触れ合った記憶が

蘇りかける。

しかしそれに蓋ふたをして……クロウはにやりと笑うのだ。

「おまえはいつか俺が殺す。それを忘れるな」

「そつくりそのまま返してやるわよ、裏切り者！」

相反する少年少女がセカイを再構築する
ヒロイックファンタジー大作



2019年2月15日頃
全国の書店をまで発売！

著：霜野おつかい／イラスト：イセ川ヤスタカ